

## ラストヌラからシラーズまで

加藤 一朗

海路二十日、京大西南アジア研究会の田中琢君（考古学

専攻）、高林藤樹君（東洋史専攻）と私の三人は昨年八月十日無事東アラビアのラストヌラ港についた。この専ら石油の積出しのための港における上陸には種々の困難が予想され、事実入港前に当港のカヌー代理店（交通公社の如きもの）から上陸不可能の電信を受けたりしたが、結局同じカヌー代理店のダンマーム支店長マホメツト・サルマン氏という親日家の斡旋で出入国の手続も至つて簡単にすみ、アバダン向けの飛行機の便をまつ間、十日間というものの、ダハラ飛行場にある政府経営の冷房の完備したエアポート・ホテルに起居することができた。十日夕刻になつて上陸を許可され、港からホテルまでの百料をこえるドライブの時の、日頃研究する西南アジアの一角に足跡を印したのだという感激は、いまなお忘れることができない。

温度についていうなら、ホテルのベランダの通風のよい日のかげつたところで、午後の気温が摂氏四十三度前後であつた。またアラムコ（アラビア・アメリカ石油会社）の発行する英字新聞によれば、われわれの滞在中の週間最高気温

は摂氏四十七度であつた。

われわれの調査旅行の本来の目的地はイランであつて、アラビアのこの地方を経由したのは専ら船便の都合によつたのであるが、このためにかえつて、われわれは最も典型的な砂漠をつぶさに観察し、またアメリカの巨大な石油資本の活躍、この影響の下におけるアラビア人の遊牧生活からアメリカ式生活への急激な移行をまのあたり見ることができた。またアラムコで働き日本婦人を妻とする地質学者モリス氏の好意で、南アラビア出土の石器とカティーフ出土の土器類を見る機会をえた。前者は褐色のフリントで年代はもとより不明であつたが、後者は朱銭が共に出土しているところからその頃のものと推定された。

八月二十日、われわれはオランダのKLM会社の国際線で空路アバダンにわたることができた。ホテルに十日間待機したのちのこの飛行は、僅かに一時間二十分であつた。アバダンでは気温はアラビアほど高くはなかつたが、それでも深夜で三十五、六度あり、湿気の多いせいにか、冷房のない安ホテルでは殆んど一睡もできなかった。翌二十一日

夕ホラムシア駅から一日一本のテヘラン行にのりこんだ。列車はコンパートメント式で、われわれは二人のトルコ系イラン婦人と一人のバグダードからの旅行者と相乗りであった。このイラク人は自らアツシリア人の子孫と名のり、古代アツシリア帝国の歴史を滔々と弁じたてた。しかし短い黒みをおびた髪、白い皮膚、茶色の瞳から、われわれの眼には典型的なアラブ人と思われた。列車は多くのトンネルを通過しつつザグロス山脈をこえ、二十二日午後テヘランについた。無限にひろがる褐色の大平原（土沙漠）を十数時間も走りつづけたのち、眼前に巨大なテヘランのオアシスがひらけはじめたとき、西南アジア研究会長足利惇氏教授の「ともかくも行つてごらん、とてつもなく広いんだから。オリエントの研究はあせつてもだめ、本腰をいれてちつくりやるほかないということがわかるだろう」というはなむけの言葉を想いだした。この日から約一カ月の間、イラン高原の所々に滞在したことになる。気温は日本の夏とほぼ同じくらいであつたが、空気が乾燥しているせいか暑さはそれ程に感じなかつた。ただ海拔千数百米もあるため気圧の関係からか、同行の両君は知らず、私は終始体に一種げだるさを覚えていた。われわれはテヘラン大学から提供されたユニバーシティ・クラブ（外国人留学生寮）の一室に旅装をとき、まず疲れをいやし、大使館の人々に挨拶に行き、種々のことづてを商社の人々につたえ、博物館を訪れたりして数日をついやした。

八月二十五日、早朝テヘランをたち、バスでイスパハン

に向つた。テヘラン大学の留学生井本英一氏（京大文学部助手）が同行。同氏のたんのうなペルシア語がわれわれの爾後の旅行をどれだけ助けてくれたか計り知れない。イランでは鉄道交通の充分発達する前に広大な土地柄から飛行機やバスによる交通が急速に発達しつつある。バスは数時間走つては食事その他の用をたすために二、三十分停車するいわばアメリカのバス旅行に似たものであるが、ただアメリカのように終日終夜国内の幹線を諸車が奔流のように流れているのと異なつて、いずれも早朝に始点を出発し午後早いうちに終点につくようになってゐる。長距離の場合はこれを繰返すことになる。ちようど古来のキャラバンの旅程とにている。バスに夜行のないのは、道路の不備（多くは未舗装）のためか、治安の必ずしも安全でないためかわからない。どのイラン人にきいてみても治安の不備なためではないということであつたが、いずれにしてもイラン高原の光景は行けども行けども乾ききつた、灌木の点々と生じる褐色の沙漠と、これを壁のようにしきつてゐる、一木一草の見られぬ岩石の丘であつた。このような光景を単調とよぶことも壮大とよぶこともできる。われわれの印象は後者であつた。緑の濃い島国に育つてオリエントの歴史を研究しつつあるわれわれはこのような丘と平原との繰返しをあかず眺めて、この広大無辺さを体感し、何とかして消え去らぬ印象を心にきざみつけようと努力していた。車の走るにつれて、乾燥がいよいよはげしく一草も見られぬ沙漠にもであつた。しかし最も驚異的であつたのは、クムの

東方のダリア・イ・ナマク（塩の河）を遠望したときであつた。往時海底であつたといわれるこの高原では所々に塩の原を形成し、水のかれた河川はしばしばいたましくも白い塩のふいた底を見せていた。このような自然と闘いつつ、水のあるところには人々は聚落を形成し、またカナートとよばれる地下灌漑溝を利用して山麓の地下水を、時には数十軒の距離をも導いて耕作していた。豊富な地下水が時に地上に現われてかなりの水量の河川をなすところでは、イスパハン、シラーズのごとき人口十万をこえるオアシス都市がさかえていた。

イスパハンではバス会社指定の宿にとまつたが、アルメニア人が経営すると見えて部屋にはキリストやマリアの像がかざられてあつた。この都市に住むただ二人の日本人、江商の清水氏と外務省の加藤氏の世話で、われわれは故宮寺院、シャー・アツバス帝の建立した石橋などを見学することができた。翌二十七日、われわれは早朝イスパハンをたち同じくバスでシラーズに向つた。去来する岩石の丘陵がいつそう赤味をおびて来た程の違いくらいで光景は前日の旅と変らなかつた。しかしシラーズに近づくにつれて少しく景観を異にしはじめた。沙漠の上の灌木が密になり緑をまして、草原とよんでもよいようなところがそこに見えられた。（緑にまじつて真黄な色を見せているのは花かと思つたが、これは黄葉であつた。）水田も見えられた。このようにやや水に恵まれた地方を過ぎ、再びしばらく沙漠の中を走つたのち、われわれの前にはからずも写真で見られ

ているペルセポリスの石組が左手に現われた。われわれはついで行くべきところに行きついたという感慨にふけつた。ただこの宮殿のいかに壮麗であつたかは、後にここを訪れて残された柱や門の間をめぐつてはじめて想像されたのであるが、まる二日イラン高原のパノラマを眺めつづけた眼には、この瞬時の、最初のペルセポリスの印象はむしろ「小さい」もしくは「それ程大きくない」というものであつた（少くとも私だけは）。そしてなお数箇の小聚落を過ぎ、午後四時過ぎシラーズの門をくぐつた。ここでは旅装をとくまもなく、バスの中で知合つた衛生将校の案内で詩人ハーフィーズやサアーデイの墓にもうで、バザールや諸モスクの位置をたしかめたのち、おなじくかれの世話で手頃なハーフィーズホテルにおちついた。ここをいわばペルセポリスその他の史跡を踏査する筈であつた。